vol.35 沖縄の歴史の見方が変わる？

煙管（きせる）の雁首（がんくび）

■ 出土地：首里城跡、湧田古窯跡

今月は、煙草を吸うために用いる喫煙具の「煙管」を取り上げます。文献史料によると、沖縄の煙草は万暦（ばんれき）年間（1573 ～ 1620 年）に薩摩から伝わったとされています。この説は発掘調査の成果とも概ね一致しており、少なくとも 17 世紀前半の沖縄には喫煙の習慣が浸透していたと考えられます。

しかし、当時の沖縄で使用されていた煙管は、石製や土製（瓦などの破片を利用したものも含む）で直方体のものや、陶製でパイプ形のものであり、金属製が主体となる同時期の日本の煙管とは素材・形態とも共通点がほとんどみられず、むしろ台湾やベトナムなどの製品に類似しています。これは、沖縄の煙草が日本ではなく、南方地域から伝来した可能性を示唆するもので、出土品から従来の説とは異なる歴史像が想定される好例といえます。

現在、何かと敬遠されがちな煙草に関係する煙管ですが、その存在はかつて沖縄が海外諸国と活発に交流した証拠の一つでもあり、小さいながらも重要な資料です。

〈新垣 力〉